

東南アジア

1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、アセアン 10 カ国のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が1%以下と低い一方、マレーシア、タイ(2011年)、インドネシア、フィリピンの4カ国は、その割合が10%~15%となっている。ベトナムは19.7%となっているが、製造業の発展により、これら4カ国の状況に近づきつつある。これら4カ国にベトナムを加えた5カ国では、都市と農村の経済格差が顕著になっているが、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、これら5カ国では、米(コメ)などの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の生産額が高くないという特徴も有している。上記以外の残り3カ国を見ると、カンボジアが農家の割合35.6%、ラオスが27.6%、ミャンマーは

30.5%となっている。政情不安が長引いたこれら3カ国では、他の産業の発展が遅れているため、相対的に農業の比重が高いが、程度の差はあるもののGDPに占める割合は低下傾向で推移しており、政情の安定化や経済の発展に伴って比重が低下してきている。

国別の農業の特徴として、マレーシアは、油ヤシ、ゴムなど永年性作物の栽培が多く、一方、フィリピンは、トウモロコシ、米などの食用作物が中心となっている。

畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、各国ごとに畜種の重要度が異なっているため、国ごとの生産量に大きな差がある(データは断りのない限り2012年の数字)。

図1 東南アジア諸国について



表1 シンガポール、ブルネイを除くアセアンの主要穀物および畜産物生産量 (単位:千トン)

国	年	米	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2008	2,353	33	29	195	930	490	66
	2009	2,511	36	29	206	1,014	524	71
	2010	2,465	48	29	234	1,140	601	66
	2011	2,576	60	30	231	1,174	635	81
	2012	2,750	52	30	236	1,210	657	74
タイ	2008	31,651	4,249	205	903	1,158	885	786
	2009	32,116	4,616	211	809	1,154	970	841
	2010	34,409	4,861	223	862	1,220	980	911
	2011	36,128	4,973	207	867	1,258	996	985
	2012	37,469	4,948	203	886	1,265	1,051	1,064
インドネシア	2008	60,251	16,324	432	637	1,350	1,324	1,023
	2009	64,399	17,630	444	649	1,404	1,308	1,278
	2010	66,469	18,328	472	695	1,540	1,382	1,313
	2011	65,741	17,629	521	721	1,664	1,284	1,379
	2012	69,056	19,387	541	729	1,752	1,335	1,423
フィリピン	2008	16,816	6,928	286	1,606	812	423	14
	2009	16,266	7,034	288	1,606	827	442	14
	2010	15,772	6,377	300	1,629	869	465	16
	2011	16,684	6,971	302	1,649	905	481	16
	2012	18,032	7,407	297	1,678	947	499	18
ベトナム	2008	38,730	4,573	333	2,783	448	247	294
	2009	38,950	4,372	369	3,036	529	273	311
	2010	40,006	4,607	384	3,036	457	321	339
	2011	42,398	4,836	387	3,099	494	345	377
	2012	43,662	4,803	393	3,160	526	350	377
ラオス	2008	2,970	1,108	44	51	17	15	8
	2009	3,145	1,134	44	55	18	15	7
	2010	3,071	1,021	45	59	20	15	7
	2011	3,066	1,096	46	57	20	16	8
	2012	3,489	1,125	48	62	21	16	7
カンボジア	2008	7,175	612	73	113	19	21	24
	2009	7,586	924	75	110	23	20	24
	2010	8,245	773	73	100	20	22	24
	2011	8,779	717	73	98	19	23	23
	2012	9,291	951	73	99	19	23	23
ミャンマー	2008	32,573	1,204	171	463	798	293	1,309
	2009	32,682	1,245	178	535	923	353	1,482
	2010	32,580	1,376	234	585	1,016	381	1,620
	2011	29,010	1,485	254	619	1,079	414	1,684
	2012	28,080	1,500	262	620	1,080	422	1,626

資料:FAOSTAT

注 1:牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

2:トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

3:過去にさかのぼって数値が変更する場合がある。

表1のアセアン各国の主要穀物および畜産物生産量を見ると、多くを占めるのが穀物で、中でも米の生産量が多いことが分かる。また、主要な畜産物は、豚肉および鶏肉

で、宗教上の理由から豚肉を消費しないイスラム教徒の人口が多い諸国では鶏肉の生産量が多く、宗教上の制約のない諸国では豚肉の生産量が多いことが分かる。

2 東南アジア諸国の畜産の動向

(1) 酪農・乳業

アセアン 10 カ国に東ティモールを加えた東南アジア諸国では、牛乳・乳製品は、一般的な食材ではなく、また、気候条件が酪農にあまり適していないことや、良質な飼料を得にくいことなどもあり、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んとはいえなかった。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、従来から全粉乳などの粉乳類か、缶入り加糖れん乳が主であったが、冷蔵施設の普及や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳製品の需要も高まりつつある。

各国とも、脆弱(ぜいじゃく)な酪農生産基盤により牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、生乳生産、工場インフラ、地理的条件などを総合的に考慮すると、将来的には、輸入乳製品からの還元乳の製造を含め、タイやベトナムはインドシナ半島の牛乳・乳製品供給基地になりうると考えられる。また、2 億を超える人口を擁し、ジャワ島を中心に近年経済発展を遂げているインドネシアについても、乳製品需要の伸びが期待され、ベトナムなどとともに、外資系企業の参入も積極的に行われている。

一方で、東南アジア諸国では、乳製品の定義や各国統計上の取り扱いがあいまいであることから、乳製品の需給動向の正確な把握は困難なものとなっている。

① 生乳生産動向

表 2 を見ると、2012 年の乳用牛の飼養頭数は、乳製品需要の高まりを背景にインドネシア、フィリピン、タイ、ベトナムで増加したが、マレーシアでは減少した。

インドネシアの 2012 年の乳用牛飼養頭数は、前年比 3% 増の 61 万 2000 頭であった。乳用牛は、その大部分がジャカルタなど大消費地に隣接するジャワ島の冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。インドネシア政府は、乳用牛増頭計画を掲げ、豪州から繁殖牛を輸入しているが、繁殖牛の遺伝的能力が低く、零細な経営が多くを占めているという課題もある。このため、2012 年の飼養頭数は

増加したものの、1 頭当たりの泌乳量の減少により生乳生産量は同 2% 減の約 96 万トンとなっている。

マレーシアの 2012 年の乳用牛飼養頭数(サバ、サラワク州を含まず。以下同じ。)は、の 3 万 3000 頭(前年比 6% 減)であった。乳用牛は大半が半島部で飼養されており、特に飼養頭数が多いのは、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、北西部のペラク州などである。また、乳用牛は、ホルスタインとインド系在来乳牛の交雑種が過半を占め、それ以外はインド原産種となっている。2012 年の生乳生産量は、7 万 7000 トン(前年比 5% 増)となっている。歴史的に天然ゴムや油ヤシのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料基盤整備が課題となっている。

フィリピンの 2012 年の乳用牛飼養頭数は、約 1 万 9300 頭(前年比 11% 増)と増加傾向で推移している。そのほか、約 1 万 6000 頭の水牛が乳用として飼養されている。2012 年の生乳生産量は、1 万 8000 トン(同 80% 増)となりうち約 6 割が牛由来、残りの 4 割は水牛乳とヤギ乳とみられている。なお、生乳換算による自給率は 1% 程度となっている。

タイの 2012 年の乳用牛飼養頭数は、約 57 万頭 3000 頭(前年比 3% 増)であった。1999 年から 2005 年までの飼養頭数は増加傾向で推移していたが、2006 年は原油高などによる生産コストの上昇を受けた酪農家戸数の減少に伴い、飼養頭数は大きく減少したが、2008 年後半以降の原油価格や飼料価格などのコスト低下を受け、その後飼養頭数は、回復基調にある。

ベトナムの 2012 年の乳用牛飼養頭数は、16 万 7000 頭(前年比 17% 増)であった。乳用牛の約 7 割は、乳製品の主要消費地となるホーチミンで飼養されている。乳用牛は、フランス植民地時代に造成されたライシン種に、近年、これにホルスタイン種を交配し、更なる生乳生産量の増加に取り組んでいる。生乳生産量は 38 万トン(前年同水準)となっている。

表2 乳用牛の飼養頭数と生乳生産動向(2012年)

(単位:千頭、千トン、%)

国名	飼養頭数	前年比 (増減率)	生乳生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	612.0	3	960	▲2
マレーシア	32.6	▲6	77	5
フィリピン	19.3	11	18	80
タイ	573.0	3	870	1
ベトナム	167.0	17	382	0

資料:各国政府統計、FAO

注1:マレーシアの飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州を含まず)。

注2:マレーシアの生乳生産量は、1リットル=1.03kgで重量換算。

注3:フィリピンは水牛乳およびヤギ乳を含む。

②牛乳・乳製品の需給動向

東南アジア諸国では、牛乳・乳製品の国内消費量に占める輸入量(生乳換算)の割合は一般的に高く、半分以上を占めている。乳製品輸入は粉乳が主であり、小分けして販売されるほか、LL牛乳や缶入り加糖れん乳なども、全粉乳や脱脂粉乳の輸入品から還元製造されるものが多い。

表3を見ると、インドネシアの2011年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、6.5キログラム(前年比25%増)となり、人口増加および経済発展に伴い乳製品需要が急速に増加しつつある。

マレーシアの2012年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、18.1キログラム(同4%減)と前年からは減少したが、東南アジア諸国最大となっている。2012年同国の牛乳・乳製品の輸出量は約40万トンと国内生産量の約5倍となっているが、ニュージーランドや豪州から輸入した粉乳の乳成分を原料として、国内で調製品や食品に加工して輸出しているためである。

フィリピンの2012年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量は、1.2キログラム(前年比8%減)となった。牛乳・乳製品のほぼ全量がニュージーランド、米国、豪州からの輸入品および輸入品を原料とした加工品となっており、フレッシュ牛乳の飲用習慣は希薄とされている。

タイの2011年の牛乳・乳製品の1人当たりの消費量は、15.8キログラム(前年比8%増)となった。デンマーク政府の協力のもと設立されたタイ酪農振興公団や外資系企業による生産の拡大、また、学乳制度の導入などにより乳製品の消費量は増加傾向で推移している。なお、2012年の牛乳・乳製品の輸出量は約12万トンとなっている。これ

は、豪州から輸入した脱脂粉乳を原料として、還元乳やれん乳などへ再加工の上、周辺国などに輸出しているためである。

表3 牛乳・乳製品需給(2012年)

(単位:生乳換算、千トン、kg)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり 消費量
インドネシア	960	1,746	2,619	87	6.5
マレーシア	77	1,321	808	405	18.1
フィリピン	18	1,379	1,229	168	1.2
タイ	870	905	1,659	116	15.8

資料:各国政府統計、FAO

注1:インドネシア、フィリピンおよびタイの消費量は、

「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注2:フィリピンは水牛およびヤギ由来の乳を含む。

注3:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州を含まず)。

注4:インドネシア、フィリピンおよびタイの1人当たり消費量は、2011年のデータ。

(2)肉牛・牛肉産業

東南アジア諸国では、農作業の機械化により役用としての水牛の飼養頭数の減少が進む一方、肉用牛の飼養頭数が増加している。

牛肉需要を見ると、1人当たり消費量は各国とも横ばいで推移している。また、食習慣や経済状況の差が大きく、国ごとに1人当たり消費量に大きな差がある。

牛肉の消費が伸びない要因は、牛肉が豚肉・鶏肉に比べて高価であること、宗教上または役用である牛を食さないことなど、価格面や信仰などによる影響が強く残っていることである。

①牛の生産動向

表4を見ると、インドネシアの2012年の肉牛飼養頭数は、1598万1000頭(前年比8%増)と増加傾向で推移している。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占める。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して3カ月程度肥育するフィードロット産業が盛んである。一方、水牛の飼養頭数は農作業の機械化により減少しており、150万頭台を割り込む水準となっている。

マレーシアの2012年の肉牛飼養頭数は、頭数が把握できる半島部で、66万4000頭(前年比1%増)となった。

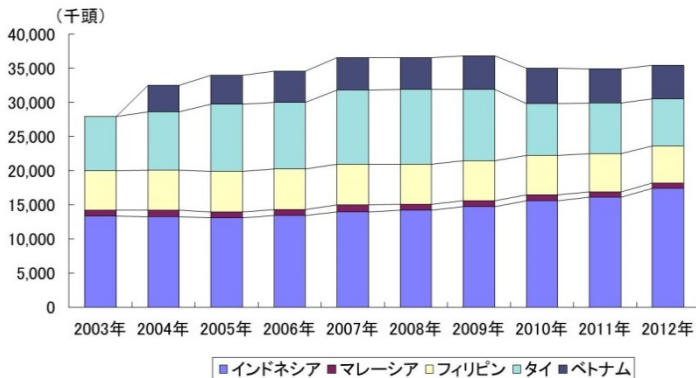
飼養頭数の割合は、肉牛が9割を占め、水牛が1割である。水牛は役に供される機会の減少に伴い頭数も減少している。

フィリピンの2012年の肉牛飼養頭数は、249万3000頭(前年比1%増)、水牛飼養頭数は296万4000頭(前年比4%減)となっている。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、牛・水牛ともに飼養頭数が20頭未満の小規模経営が全体の9割以上を占めている。このため、同国政府は農村部での零細経営の就労機会、収入の確保などを目的とした新技術の普及促進、専門家の育成などの畜産振興策を打ち出している。

タイの肉牛飼養頭数は、政府の肉牛振興政策などにより2001年からは微増傾向で推移したが、2012年は539万3000頭(前年比8%減)となった。また、役用として供されている水牛の飼養頭数も農業の機械化が進み154万2000頭(同3%減)と減少している。タイでは、ミャンマー、カンボジア、ラオス、中国など周辺国からの生体牛輸入が増加しており、このうちミャンマーからの輸入が大半を占めている。タイは、周辺国から輸入した牛を肥育し、それをマレーシアに生体で輸出している。

ベトナムの2012年の肉牛飼養頭数は、229万5000頭(前年7.5%減)と減少傾向で推移している。ベトナムは、生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国から輸入して肥育を行っている。

図2 肉牛・水牛の飼養頭数の推移



資料:各国政府統計

注:2003年のベトナム飼養頭数は未公表のためデータなし

表4 牛の飼養頭数と牛肉生産量(2012年)

	飼養頭数		牛肉生産量 (水牛を含む)	前年比 (増減率)
	肉牛	水牛		
インドネシア	15,981	1,438	546	5
マレーシア	664	66	51	4
フィリピン	2,493	2,964	295	▲2
タイ	5,393	1,542	203	▲2
ベトナム	2,295	2,628	382	2

資料:各国政府統計

注1:マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ(サバ、サラワク州を含まず)。

注2:マレーシアの肉牛の飼養頭数は乳用牛を含む。

②牛肉の需給動向

表5を見ると、インドネシアの2011年の牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉、水牛肉あわせて2.5キログラムとなっている。牛肉の消費は、ジャカルタなど一部地域に集中しており、また、食肉全体の消費についても民族・宗教によって慣習が異なることなどから、地域ごとに異なる。

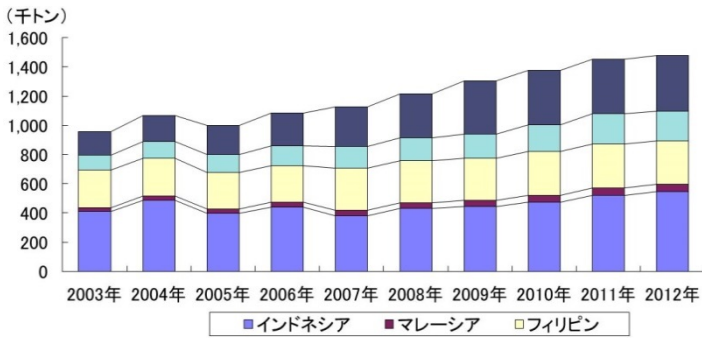
マレーシアの牛肉消費量に占める輸入品の割合は約7割と4カ国(インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ)の中で最大となっている。輸入先はインド、豪州である。2012年の牛肉の1人当たり年間消費量は、前年と同水準の6.2キログラムと東南アジア諸国の中でも最大である。

フィリピンの牛肉自給率は、8割程度である。牛肉輸入量は、4カ国のうちマレーシアに次いで多く、インド、ブラジル、豪州などからが多い。このうちインド産については、安価な水牛肉がコンビーフに加工されるなどして食されている。2012年の牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉、水牛肉合わせて3.3キログラムで前年並みの水準であった。

タイの牛肉輸入量は、2万5000トンとなっており消費量に占める割合は1割弱と少ない。2011年の牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉、水牛肉あわせて2.6キログラムとなり、前年比16%減となった。

ベトナムも牛肉自給率は、9割を超える。牛肉輸入は、豪州、ニュージーランド、インド、米国などからが多い。2012年の牛肉の1人当たり年間消費量は、牛肉、水牛肉あわせて3.3キログラムで前年並みの水準であった。

図3 牛肉・水牛肉の生産量の推移(2012年)



資料:各国政府統計、FAO

表5 牛肉の需給動向

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン、kg)	
					1人当たり消費量	
インドネシア	546	39	585	0	2.5	
マレーシア	51	122	174	4	6.2	
フィリピン	295	86	381	0	3.3	
タイ	203	25	208	20	2.6	
ベトナム	382	-	-	-	3.3	

資料:各国政府統計、FAO

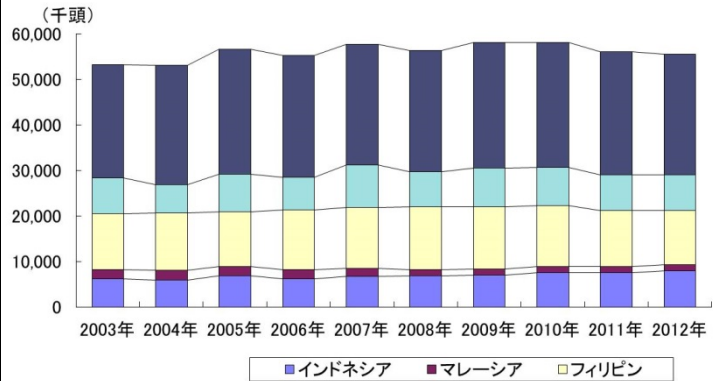
注1:水牛肉を含む。

- 2:インドネシアおよびタイの消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。
- 3:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。
- 4:インドネシアおよびタイの1人当たり消費量は、2011年のデータ。
- 5:ベトナムの輸出入量および消費量に関する統計は公表されていない。

(3) 養豚・豚肉産業

東南アジア諸国では、インドネシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食しないイスラム教徒の人口が多い。このため、国によって豚肉の消費量には大きな格差があり、国の政策上の位置付けもさまざまである。しかし、イスラム教徒が多数を占める国でも、中国系住民などの豚肉需要はあり、飼養規模、地域などの規制はあるものの、養豚業は行われている。

図4 豚の飼養頭数の推移



資料:各国政府統計

① 豚の生産動向

表6 豚の飼養頭数と豚肉生産量(2012年)

国名	飼養頭数	生産量	
		(千頭、千トン、%)	前年比(増減率)
インドネシア	7,900	232	3
マレーシア	1,437	233	1
フィリピン	11,863	1,653	1
タイ	7,824	870	2
ベトナム	26,494	3,160	2

資料:各国政府統計、FAO

東南アジア諸国では、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群(PRRS)などの家畜疾病が継続して発生していることもあり、家畜衛生対策が喫緊の課題である。

インドネシアの豚飼養頭数は2007年以降増加傾向で推移し、2012年は790万頭(前年比5%増)となった(表6)。

マレーシアの2012年の豚飼養頭数は、144万頭(前年比3%増)となった。

フィリピンは宗教的な制約が少ないこともあり、ベトナムに次いで豚の飼養頭数が多いが、2008年の1370万頭をピークに、近年は、減少傾向で推移しており、2012年は1186万頭(同4%減)となった。

タイの豚飼養頭数は、価格や疾病などの影響により増減を繰り返して推移しており、2012年は782万頭(前年比5%増)となった。

ベトナムは、アジアでは中国に次いで2番目の豚飼養頭数を誇っている。しかし近年、2009年の2769万頭をピークに減少傾向で推移しており、2012年は2649万頭(前年比2%減)となっている。

② 豚肉の需給動向

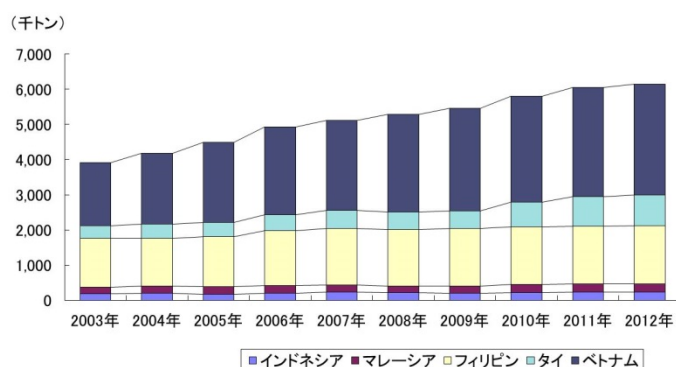
表7を見ると、2012年の豚肉生産量は、インドネシアが23万2000トン(前年比3%増)、マレーシアは23万3000トン(同1%増)、フィリピンは165万3000トン(同1%増)、タイは87万トン(同2%増)、ベトナムは316万トン(同2%増)となった。

2012年の豚肉消費量は、インドネシアが23万3000千トン(同4%増)、マレーシアは24万8000トン(同2%増)、フィリピンは177万2000トン(同1%減)、タイは84万5000トン(同2%増)となった。

東南アジア諸国の豚肉の消費動向は、宗教の影響を強く受けており、2011年の1人当たり豚肉消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアが3.0キログラムであったのに対し、タイで12.8キログラム、ベトナムでは34.4キログラム、また、食肉に関する宗教的制約の少ないフィリピンでは、2012年が同14.7キログラムとなっており、国による差が大きい。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民(非ムスリム)などが人口の4割程度占めていることから、2012年の1人当たり豚肉消費量は8.4キログラムであるが、非ムスリムに限ると同20.9キログラムとなっている。

図5 豚肉の生産量の推移(2012年)



資料:各国政府統計、FAO

表7 豚肉の需給の推移(2012年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	(千トン, kg)
					1人1年当たり消費量
インドネシア	232	1	233	0	3.0
マレーシア	233	10	248	1	8.4*(20.9)
フィリピン	1,653	119	1,772	12	14.7
タイ	870	3	845	28	12.8
ベトナム	3,160	-	-	-	34.4

資料:各国政府統計、FAO

注1:水牛肉を含む。

2:インドネシアおよびタイの国内消費量は、「国内生産量+輸入量-輸出量」で算出。

3:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

4:マレーシアの()内は非ムスリムのデータ。

5:インドネシア、タイおよびベトナムの1人当たり消費量は、2011年のデータ。

6:ベトナムの輸出入量および消費量に関する統計は公表されていない。

(4) 養鶏・鶏肉産業

① 鶏の生産動向

東南アジア諸国では、宗教上の制約がないことで、ブロイラーや採卵鶏の飼養が盛んであり、主に在来鶏を中心に、アヒルなどの家きんも飼養されている。

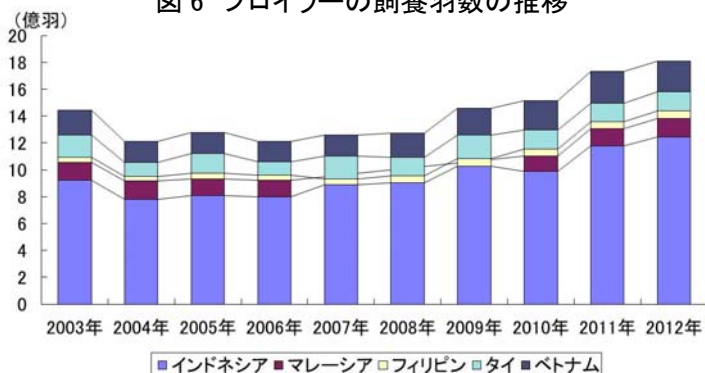
表8を見ると、インドネシアは、東南アジア諸国地域で最多の鶏の飼養羽数を誇る。ブロイラーの飼養頭羽数は、南スラウェシ州などでの鳥インフルエンザ発生の影響を受け、2010年は9億9千万羽まで減少したが、2012年は前年比6%増の12億4400万羽まで回復し、鶏肉生産量は同5%増の140万トンとなった。2012年の採卵鶏の飼養羽数は同11%増の約1億3900万羽、鶏卵の生産は同11%増の114万トンとなった。

マレーシアの2012年のブロイラー飼養羽数は、2005年の鳥インフルエンザの発生により減少がみられたものの、徐々に回復し、1億4000万羽となった。また、鶏肉生産量は137万5000トン(同3%増)となった。採卵鶏の飼養羽数は約4650万羽、鶏卵の生産量は64万3000トン(同3%増)となった。

フィリピンの2012年のブロイラー飼養羽数は、約5700万羽(前年比5%増)、鶏肉生産量は9万9000トン(同7%増)となった。採卵鶏の飼養羽数は約3150万羽(前年同)、生産量は42万1000トン(同4%増)となった。

タイは、鳥インフルエンザが発生した2004年以降、EUや日本向けの生鮮鶏肉の輸出が停止した(EUは2012年7月1日に、日本は2013年12月25日に解禁している)。このため、飼養羽数は鶏肉調製品の輸出量に左右され、大きな増減を繰り返していたが、ブロイラーの飼養羽数は2011年が1億3800万羽(同1%減)、2012年が1億4200万羽(同3%増)と近年安定的に推移している。採卵鶏についても2004年以降大きな増減を繰り返していたが、2011年が4050万羽(同4%減)、2012年が4150万羽(同3%増)となった。また、2012年の生産量は、鶏肉が153万8000トン(同12%増)、鶏卵が65万6000トン(同9%増)となった。

図6 ブロイラーの飼養羽数の推移



資料: 各国政府統計

注: 2001年のタイ、2007~2009年のマレーシアは、データが公表されていない。

表8 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量(2012年)

国名	飼養羽数		生産量			
	ブロイラー	採卵鶏	ブロイラー肉	鶏卵	前年比(増減率)	
インドネシア	1,244,402	138,718	1,400	5	1,140	11
マレーシア	139,758	46,536	1,375	3	643	3
フィリピン	57,284	31,524	985	7	421	4
タイ	141,818	41,489	1,538	12	656	9
ベトナム	223,746		729	5	423	6

資料: 各国政府統計、FAO

注 1: 鶏卵は1個58グラムで換算。

2: フィリピンは地鶏を含む。

② 鶏肉の需給動向

前述のとおり鶏肉消費に関しては宗教上の制約がなく、東南アジア諸国では最も身近で重要な動物タンパク源となっており、各国とも消費が伸びている。需要の増加を背景に、外資による食鳥処理場や大手ファストフードなどへの参入が最近増加している。

表9を見ると、インドネシアのブロイラーの飼養羽数は、タイの9倍程度あるにもかかわらず、鶏肉の生産量はタイの9割程度、1人当たりの年間鶏肉消費量は7キログラムとなっている。これは、コールドチェーンが未発達であることなどにより、食鳥処理場以外で処理したり生きたまま販売したりするケースが多数を占め、統計上全体の生産量が把握できないためと考えられる。

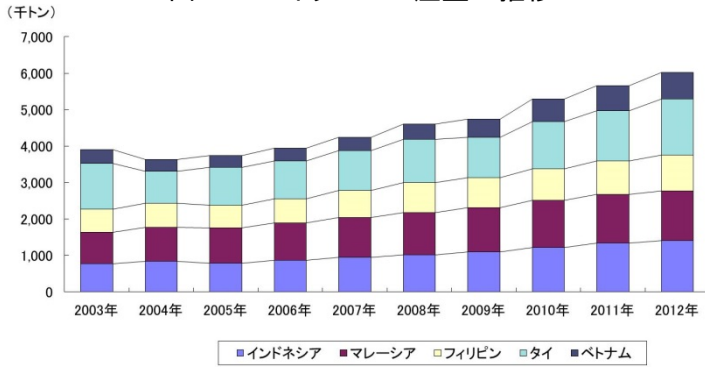
マレーシアの1人当たりの年間鶏肉消費量は、45.1キログラムとなった。なお、隣国インドネシアの鶏肉消費が伸びると予測しているマレーシア資本の鶏肉加工業者は、輸出向けの投資を加速させている。

フィリピンの1人当たりの年間鶏肉消費量は、11.3キログラムとなった。台風被害の少ないミンダナオ地域では、食鳥処理場の処理能力が拡大されるなどにより、鶏肉調製品の輸出量が増えてきている。

タイの1人当たりの年間鶏肉消費量は、12.3キログラムとなった。2004年1月以降、鶏肉の主要輸出先国が、鶏インフルエンザ発生により同国からの家きんなどの輸入一時停止措置を実施したため、輸出は、冷凍鶏肉から鶏肉調製品に移行している。

ベトナムの1人当たりの年間鶏肉消費量は、15.6キログラムとなった。同国の生産部門に対しては、人口増加による鶏肉消費の拡大を見越した外資の参入が見込まれる。

図7 ブロイラーの生産量の推移



資料:各国政府統計、FAO

表9 ブロイラーの需給の推移(2012年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人1年当 たり消費量
インドネシア	1,400	1	1,401	0	7.0
マレーシア	1,375	40	1,349	22	45.1
フィリピン	985	107	1,092	6	11.3
タイ	1,538	2	770	770	12.3
ベトナム	729	-	-	-	15.6

資料:各国政府統計、FAO

- 注 1:インドネシアおよびタイの消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。
 2:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。
 3:インドネシア、タイおよびベトナムの1人当たり消費量は、2011年のデータ。
 4:ベトナムの輸出入量および消費量に関する統計は公表されていない。

③鶏卵の需給動向

東南アジア諸国は、鶏卵を粉卵や液卵に加工する施設がほとんどないため、市場動向に応じて価格が乱高下しやすい傾向がある。また、価格の変動に伴って生産量を調整する需給安定システムが十分に機能していないことから、頻りに供給過剰の問題を抱えることとなる。

表10を見ると、1人当たり鶏卵消費量は、インドネシアが4.2キログラム、マレーシアが18.7キログラム、フィリピンが4.1キログラム、タイが11.8キログラム、ベトナムが4.8キログラム、国によって大きな開きがある(表10)。

表10 鶏卵の需給動向(2012年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人1年当 たり消費量
インドネシア	1,140	1	1,141	0	4.2
マレーシア	643	0	561	82	18.7
フィリピン	421	0	421	0	4.1
タイ	656	1	638	19	11.8
ベトナム	423	-	-	-	4.8

資料:各国政府統計、FAO

- 注 1:鶏卵は1個58グラムで換算。
 2:マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。
 3:インドネシアおよびタイの1人当たり消費量は、2011年のデータ。
 4:ベトナムの輸出入量および消費量に関する統計は公表されていない。